

ソーシャルワークとしての就労支援の成果および方法の考察

○中塚 祐起¹⁾ 中井 秀昭²⁾

1) 滋賀県社会就労事業振興センター 2) 滋賀県立リハビリテーションセンター

要旨

伊藤(2007)「ソーシャルワーカーはクライアントのケアの実践者というよりは、資源管理を主担当とする『門衛(gatekeeper)』と揶揄されるようになった。」と述べたうえで、「こうしたソーシャルワークの『門衛化』傾向は、わが国の社会福祉サービスにおいて展開されつつある、各種の『自立支援プログラム』に内在化されている問題であることに留意する必要がある。」と指摘しており、専門職として就労支援に携わる私たち自身が就労支援の具体的な成果について、改めて問い直し、自覚する必要があると言える。本稿では、ソーシャルワークとしての就労支援の具体的な成果と方法を考察するため、主に障害者を対象とした就労支援に携わる人々の意識、現状の課題、成果や方法に対する考え方についてフォーカスグループインタビューを実施した。

調査協力者らの言説をもとに、働きかけの対象となる社会の特徴や、そこに至るまでの過程や問題点を「(1) 液状化した近代社会」「(2) ゲーム盤の消失」「(3) 再帰性の時代」「(4) ディズニーランド化・過剰包摂」の4つのコードを生成し、続いて、そこから明らかとなった社会像、個人像に対して、ソーシャルワークとしての就労支援は何を成果とし、成果に到達するために、どのような方法を用いるのかという観点で「(5) 社会的連帯の理由」「(6) 近接性の創出」「(7) 感染的模倣」の3つのコードを生成した。

それぞれのコードの考察を行った結果、ソーシャルワークとしての就労支援が「価値の多元性を認めた共存社会を構築」(佐伯 1980)のために機能するためには、私たち専門職自身が「社会の眼」を持ち、広範な社会理論、過去の失敗を研究し、就労支援に必要な技術や知識を磨きながら、合理性と倫理性の両面から、人びとや様々な構造に働きかけていく必要があることが明らかとなった。

1.はじめに

2015年11月「一億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策(ニッポン一億総活躍プラン)」が取りまとめられた。一億総活躍社会とは「若者も高齢者も、女性も男性も、障害や難病のある方々も、一度失敗を経験した人も、みんなが包摂され活躍できる社会」であるとされ、検討すべき方向性の一つに「女性・若者・高齢者・障害者等の活躍促進」が挙げられており、「障害者等の就労支援体制の拡充」が検討されている。

今後、必然的に障害者をはじめとする就労困難者の就労支援が国策としてさらに強化されることが予想され、国際労働期間(ILO)第159号条約(障害者の職業リハビリテーション及び雇用に関する条約)で示されているような「障害者が適当な職業に就き、これを継続し及びその職業において向上することを可能にし、それにより障害者の社会における統合又は再統合の促進」や障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律の基本理念である「全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会」の実現がさらに前進すると思われる。

しかし一方で、斉藤(2000)も述べているように、社会国家はこの20年ほどの間で「社会的連帯¹の空洞化」に伴う「人々の社会的・空間的分断」が進み「リベラルな正義論が当てにしてきた社会的連帯の資源は目に見えて乏しくなってきた」おり、これまでの就労支援に関する法律整備の進展が、必ずしも人々の統合に寄与してきたわけではないことを示している。

加えて、伊藤(2007)は英国における社会構造の変化、制度の変遷を分析し「ソーシャルワーカーはクライアントのケアの実践者というよりは、資源管理を主担当とする『門衛(gatekeeper)』と揶揄されるようになった。」と述べたうえで、「こうしたソーシャルワークの『門衛化』傾向は、わが国の社会福祉サービスにおいて展開されつつある、各種の『自立支援プログラム』に内在化されている問題であることに留意する必要があるだろう。というのも、プログラムとは誰がやっても実施できる汎用性あるものという前提で作られるものだから、専門職としてのソーシャルワーカーでなくても、こうしたプログラムは実施できるようになるのである。」と指摘しており、まずは専門職として就労支援に携わる私たち自身が就労支援の具体的成果について、改めて問い直し、自覚する必要があるといえよう。

本稿の目的は、主に障害者を対象とした就労支援に携わる人々の意識、現状の課題、成果や方法に対する考え方について、フォーカスグループインタビューを通して明確化するとともに、ソーシャルワークとしての就労支援の具体的な成果と方法を考察することである。

2.方法

(1)調査実施年月日とデータ収集手続

フォーカスグループインタビューは、就労系事業所中間支援団体において2015年11月21日13時30分から19時にかけて実施した。調査協力者は主に障害者の就労支援の在り方に疑問や意見をもつ就労支援機関や障害福祉サービス事業所、行政機関の職員8名であり、雪だるま式(snowball sampling)に確保した。そのため、特に障害者の就労支援、現行のソーシャルワークに関して批判的な人たちが集結することになり、その意味ではインタビュー結果には偏りが生じている。しかし、現状の就労支援やソーシャルワークに対して、どのような立場から、どのような批判が行われているかについては調査協力者たちの率直な言説から明確にできるという利点も生じた。

フォーカスインタビューでは「今後、障害福祉サービスや職業リハビリテーションに関する『公的なサービス』を更に拡大した方が良いと思いますか？また、『障害』福祉サービスに代表される『状態』や『属性』に応じたサービスはさらに拡大するべきだと思いますか？」「障害福祉サービスや職業リハビリテーションに関するサービスにおいて、株式会社をはじめとする営利事業者の参入を進めるべきだと思いますか？」

「『障害者雇用』は推進した方が良いですか？」「『ソーシャルワーク』に必要とされる資質・技能は何だとお考えですか？」「生活支援、就労支援における『成果』は何だとお考えですか？(何をもちて成功と言えますか)また、成果に

到達するうえで、一番課題となっていることは何ですか？」など、あらかじめ用意した質問事項に基づくグループ討議を実施した。

なお、インタビューにあたっては、研究目的、実験方法、個人情報取り扱い、守秘義務、氏名、所属機関公表について明記した文書を手渡して、口頭で説明した上で同意を得ている。

(2) 調査協力者の属性

表1に、調査協力者の現状の職務、所属機関を示す。

表1のとおり、調査協力者の所属と職名は、中間支援団体や就業・生活支援センターや障害福祉サービス事業所の管理職や職員等であり、職種は社会福祉士、支援ワーカーや職業指導員等、様々であるが、いずれも障害者や就労困難者の就労支援に携わる支援者たちであった。

表1 調査協力者の属性

氏名	所属	役職	職種	性別	年齢
A	就労系事業所中間支援団体	常務理事	社会福祉士	男性	30代
B	障害者就労・生活支援センター	所長		男性	40代
C	障害者就労・生活支援センター	主任雇用支援ワーカー	精神保健福祉士	女性	30代
D	行政機関(障害福祉関係)			男性	40代
E	行政機関(労働雇用関係)			男性	20代
F	障害福祉サービス事業所 生活介護事業所	サービス管理責任者		男性	30代
G	障害福祉サービス事業所 就労移行支援事業所	職業指導員		女性	20代
H	障害福祉サービス事業所 就労移行支援事業所	所長	社会福祉士 精神保健福祉士	男性	40代

(3) 分析方法

フォーカスグループインタビュー結果の録音記録を逐語化して、逐語化した文章から「ソーシャルワークとしての就労支援の成果および方法」と関わる記述を抽出してコード化を行った。その結果、調査協力者の言説から「液化化した近代社会」「ゲーム盤の消失」「再帰性の時代」「ディズニーランド化・過剰包摂」「社会的連帯の理由」「近接性の創出」「模倣的感染」の7つのコードを生成した。

以下に調査協力者たちの以上の言説を提示しながら、「ソーシャルワークとしての就労支援の成果および方法」を考察していく。

(4) 倫理的配慮

本調査は、滋賀県立リハビリテーションセンター倫理会議において承認を得ている。

(承認番号 滋リ倫審第 201501)

3. 結果および考察

なお、本研究で取り扱うソーシャルワークの定義は、国際ソーシャルワーカー連盟の定義を日本語訳化したものを使用する。それは以下のようなものである。

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義

ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。
(https://www.jacsw.or.jp/06_kokusai/)

(1)「液状化した近代社会」

上記の定義から伺えるように、ソーシャルワーク専門職は様々な構造に働きかけることが重要な任務であり、ソーシャルワークとしての就労支援は、構造への働きかけの手段として行われると理解できるが、調査協力者からはそれが適切になされていないとの指摘がなされた。

また、ソーシャルワークは、個人と社会的な力が交差するところで展開されるわけだが、同時にそれはソーシャルワークを必要とする個人や集団を生み出した社会の特徴を映し出す鏡の役割を担っていることを意味しており、調査協力者の言説から、私たちが日々働きかけの対象としている社会の特徴について整理しておく。

以下、Aの言説である。

ソーシャルワークやから社会って部分に対して、働きかけなあかんのに「ソーシャルな人たちと喋るのが嫌いな人(ソーシャルワーク専門職)が多いな」と思います。なんか、身内ばかり集まって喋ってて、「誰にアクションすんの？」って。もちろん業界の中に対してアクションも大事やけど、ソーシャルっていうたら、自分達と全然違う人達にアクションしていかあかんのに、それ嫌いな人が多い(A)。

(中略)

硬いっていうかな、柔らかさが地域とか社会に無い。その、硬い、どういうたら分からんけど、硬さがある感じ(A)。

バウマン(2001)は「近代史の現段階、多くの面で斬新な性質をつかみとろうとするとき、『流動性』『軽量性』が適切な比喩になる」と述べている。これは近代史を振り返ってみた場合、社会理論の理解として新たな段階に私たちがいることを意味しており、バウマンは現代社会を「液状化した近代社会(リキッド・モダニティ)」と表現している。それは砂のように土台が構築されずに不確かな見通しのきかない時代に私たちが突入しているとの認識である。

加えてヤング(2007)は現代社会に生きる人々について、次のように語っている。「世界が多元化するにともない、昔ながらの伝統的な人生航路は失われ、常に変化する状況に合わせて自己の人生を決め直すことが美德とされるようになった。そのような多元的社会では、存在論的な不安のせいで、人々は自分のいる位置に満足することも、自分のあり方を誇ることもできなくなった。」

以下はFとCの言説であるが、日々の業務の中で彼ら自身やその周辺も、存在論的不安に見舞われていることを示している。

ある程度のちゃんと納得してもらおう言葉を用意しないと。(中略)特に今、当事者に言ってる割合よりも、新しく来た新人スタッフに言うてる割合の方が多き時がある。何でかって言うと、「私たちのやっている意味はなんなんですか？」と聞かれる。(中略)そこがうちも過渡期なんかなって思う。その中で何をどう伝えていこうか(F)。

(中略)

私、障害者就業・生活支援センターにいて、(成果を)あんまり感じた事ない。「うれしいな」「やったな」って感じることあんまりないんやけど(C)。

近代化⁴の進展は「液状化した近代社会」をもたらした。その中では、あらゆる価値観は急速に相対化され、同じ価値観を持つ人々は閉鎖的なコミュニティ(それは必ずしも実体的な組織を形成している必要はない)を形成することとなり、宮台(1994)はそれらを「島宇宙」と呼んでいる。

社会には互いに違う価値観を持つ「島宇宙」が多数存在しており、どのグループも自分の優位性を決定づけることはできず、しかも互いに連関なく並立しており、相互のコミュニケーションや議論を著しく困難にしている。なぜなら「私たちの心は自集団に関する正義を志向するよう設計されて」(ハイト 2014)いるうえ、相互の前提となる価値観が全く違うので、話しても無駄だとお互いに承認しあっているからである。

宮台(前掲)はこのようなコミュニティが並列的に存在して互いのコミュニケーションが成立しなくなる一連の状況を「島宇宙化」と表現しており、この状況下では「多様性の尊重」や「障害者の社会における統合又は再統合」、「共生」を良きことだとする絶対的な規範は伝達し得ない。

かくしてソーシャルワークとしての就労支援は、それ自身の原理や価値を全面に押し出して実践することを許されなくなり「経済的に意味を持つ」ようなやり方、つまりは、「依存的な人々を独立させ、足の不自由な人々を自らの足で歩かせることでしか、その継続的な存在意義を正当化することができない」(バウマン 前掲)状態に追い込まれているのである。

A、F、Cの言説から島宇宙化の進行と就労支援を行う専門職の間でも存在論的な不安が広がっていることが明らかとなったが、加えてFは障害のある当事者間、関係者間でも同様の事態が発生していると語っている。

以下、Fの論述である。

(2)「ゲーム盤の消失」

それで思ったのは、措置(制度)に対する反発として、ものが言える当事者と「あ一言えないうすわ」っていう、ものが言えない当事者の二極があったんです。(中略)ホンマに言えへん重度の知的(障害)の人はどうやったんかな？って。ちょうど今の事業所に入ったのが、その時期やったので。どうなんかなって、ある方に聞いたんです。「どうなの？」って。(僕が思うのは)もの言える障害者だけのもんちゃうねん。制度は。(その質問に対して)「Fちゃんよう分かってんねん。」「それはあんまり言うてくれるな。痛いところついてくれるな」って(F)。

(中略)

(過去の法整備・施設整備の過渡期を振り返って)俺、行政の人は敵じゃないと思いました。

(中略)個人的な感想ですよ。「あんときの手探りでお互いやっていこうぜ」という感じが無いですわ、今。それが何でか分からないですけど(F)。

宮台(2014)は日本において被差別部落共同体や在日韓国人共同体が、法整備の進展によって共同体内の強固な団結や、温かな相互扶助の気風などを失っていったことを指して「ノーマライゼーションの地獄」と表現している。

米国やフランスでは、社会の中心から疎外され周辺化された者たちもまた、誇りある固有の文化(例えば労働者階級分化や黒人文化)を持っており、そうした文化を維持したままで、より良く生きることを求めて要求を行うため、格差や差別の解消によって、連帯が消失することがないが、日本の社会運動は社会の中心から疎外され、周辺部に追い遣られた存在が、社会の中心部にいる人間と同じ生活環境を要求するという側面が強いため、要求が通り、中心に近づけば近づくほど、コストを支払って政治運動やその基盤となる社会的連帯を持続させようという動機は低減していくことになる。

宮台(前掲)は前述のような日本における社会運動を「日本的ノーマライゼーション(非周辺化)」と呼んでおり、「日本人はゲームとゲーム盤の差異に鈍感である」と続ける。

つまり、何か問題があった際に社会運動としての要求を効果的に行うためには、日頃から大規模な要求運動を行うための基盤である社会的連帯を保全するだけの維持コストを支払い続ける必要があり、デモやストや暴動は、政治ゲームの片方のプレイヤーである政治的支配陣営に対して再配分を要求する攻撃行為であると同時に、政治的支配陣営自体の連帯を再確認し、ゲームの基盤となる「政治的支配/被支配」の二項対立を保全するための防衛行為でもあるが、自分たちの政治的要求に直接関係のない運動に参加しないという形でコストを節約しようとすると、後者が疎かになってしまうのである。

Fの論述から、日本的ノーマライゼーション(非周辺化)」に則った社会運動と法整備の進展によって、Fの周辺における「手探りでお互いやっていこうぜ、という感じ」、つまりゲーム基盤となる社会的連帯が消失している事が示唆されており、Fは以下のように続ける。

自分の事業所の課題なんやけど、極端な話、(現在の自分達や当事者は)食っていける。昔の人たちはセーフティを作るのに必死だった。でも若い人たちは違う(F)。

(中略)

以前、(年代が上の)先輩当事者が悩んでいた。若い当事者からしたら、先輩当事者の話はモノクロなわけ(F)。

以上のような論述から伺えるのは、ソーシャルワーク専門職のみならず障害のある当事者間、関係者間にあっても「島宇宙化」が進行しているという事実であり、私たちは『運命を分かち合う』というロールズの言葉が空語としてしか響かないような状況を迎えつつ(齋藤 前掲)ある。

それはソーシャルワークの中核をなす社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理にとっては大きな脅威となっている。なぜなら、「島宇宙化」の進行は「共通世界の共通性を失わせ、世界のリアリティそのものを分断する」からであり、「ある空間を生きる人びとが提起するニーズ解釈や不正義に対する訴えは、別の空間を生きる人びとにとってはまったく現実味」をもたず、「立場を異にする者たちとの間の政治的コミュニケーションを妨げ、別の空間を生きる人びとに対する無関心や、歪んだ表象をもたらしていくから(齋藤 前掲)である。

バウマン(2008)が「必要とされず、望まれず、見捨てられた彼ら貧困者の居場所はどこなのか?もっとも短い回答、それは視野の外である。」と言うとき、私たちはソーシャルワークとして行われる就労支援の存在意義、「生と福祉に

対する態度と決意」(伊藤 2009)が問われる岐路に立たされている。

この現状に対して異議申し立てをし、異なった社会的条件を生きる人びとが生かし合う社会を構想するなら、「液化化」、「島宇宙化」の過程および原因を認識し直すことから就労支援の成果と方法を検討しなければならないだろう。

(3)「再帰性の時代」

以下はA、F、D、Hの論述であるが、「液化化」、「島宇宙化」の過程および原因についてそれぞれの視点から語られている。

(障害福祉) サービスがあるから利用者を作ってしまう。すごく思う。無かったら無かったで何とかなるのに。最たる例が放課後等デイサービス。わざわざ(障害福祉) サービスにする必要はなかった。地域の学童で対応できたら。結局また、障害児だけが集められて、障害児のサービスが出来て山ほど増えていって(A)。

(中略)

良かれと思ってやった制度(障害福祉サービス等)が障害者を作るっていう。例えばIQの基準が上がったら僕らも障害者ですもんね(F)。

そもそも括り方が違う。「障害者」で括るから、障害関係課の仕事になる。「労働」で括れば労働関係課の仕事になる。これはA氏も言っていたが、「福祉」というところで、「働くことの」支援を考えるというところで矛盾している。その通りやと思う(D)。

(中略)

(就労支援を)普通の町のベーカリー(企業・商店)がやれば?って話なわけよ。さっき言うてた、給付金をちよつとだけ渡すから、そこでね、「障害のある人たちも働けるやん」って。今うちで、特別養護老人ホームさんとかで、ヘルパー(免許)取ってくれた子らが働く、幼稚園で働いている。そこにもう少し、我々の作業所っていうものが無かったとしたら、そこにちよつとずつお金が入って、そこにある程度の専門機関がコーディネートしたりとか、組み立てたりとか助言しながら、企業も育ていけば、雇用がどんどん確保できるし、作業所なんていらんっていう図式じゃないですか。(中略)特別養護老人ホームを作るから、町の中に老人がいなくなる(H)。

そもそも就労移行支援事業所ってなにすんの?障害福祉って何すんの?アセスメントって何すんの?っていうところの、根底の部分をちゃんと抑えていく機会がないと、成り行きで始まってきて、Dさんの言われた、「(違う部署から)戻ってきても何も変わってないじゃん」というところ(H)。

(中略)

目的と手段が混同してしまって、何が目的なのか、分からなくなってくるんでしょうね(A)。

液化化した近代社会以前^Ⅷ、近代化の過程においては善意や自発性によって構成された「生活世界(地域、家族、共同体…)」を生きる私たちが、より便利で豊かになるための便宜や手段として役割やマニュアルで構成された「システム」を使うのだと、自己理解が可能であった。

しかし、「システム」が全域化するにつれて、「全てが機能的評価を踏まえた選択対象(として入替可能)になっているので、<生活世界>も厳密には<システム>の外ではなく、<システム>の局域に過ぎなくなる」(宮台 前掲)ため、もはや私たちが「システム」を使っているとは言えなくなっている。

A、F、Hらの言説にあるように、私たちは、私たち自身や支援対象者が便利で豊かになるために、あるいは「多様性の尊重」や「共生」のために、障害福祉サービスや高齢者サービスというシステムを、良かれと思って整備、拡大してきたわけだが、その結果、障害児が地域の学童に通う、町の中に老人がいる、といった「生活世界」は空洞化し、障害福祉サービスや高齢者サービス、IQの基準という「システム」が主体を構成する現象が発生することとなった。

このように、私たちは「『主体もまた構成されたものに過ぎない』という認識を含めて『選択の前提(主体、自然、構造…)』もまた選択されたものに過ぎないという再帰性ivへの自覚が広がる時代」(宮台 前掲)に生きており、もはや「システム」でなければならぬ必然性を感じることや、正当化することは困難な状況に陥っている。

なぜなら、その「システム」を良きものだと見なすベースたる自明的な生活世界、当り前さは「システムの全域化」によって、すでに失われているからである。

当り前さに立ち戻ることが可能であれば、そこに立ち現れる私たちが、あえて残すにせよ、構築し直すにせよ、再帰的选择を行えると感じられるが、立ち戻る「生活世界」を失った私たちは「システム」を正当化する機能さえ持たない。うえ、「選択をやめて安らげるような、選択以前の選択前提」も無く、「するも選択、せざるも選択」という再帰性への自覚の広がりをもたらす過剰負担にさらされている。

そのような過剰負担の中ではHの言う「根底の部分」や、Fが先に述べた「私たちのやっている意味」、つまり「選択前提の再帰性」を万人が意識して日々を生きるのは困難であり、「選択前提の再帰性を意識する者と意識しない者が分化せざるを得ず、必然的に社会は(アミューズメントパークがそうであるように)目障りなもの、面倒なものを徹底的に隔離・隠ぺいしつつ、いくつかの選択肢(アトラクション)を提示することで快適さを演出する「ディズニーランド」と化していった。(宮台 前掲)

(4)「ディズニーランド化・過剰包摂」

「ディズニーランド化」は人びとを過剰負担から解放することに成功したが、調査協力者の中には「選択前提の再帰性」を意識する者がおり、それぞれから「ディズニーランド化」の一例と影響が述べられている。

以下、F、D、B、E、Hの論述である。

(当時、障害当事者が)選択できるものが無かったので、自分の法人ができた。ただ、30年経って、「本当に良かったのか」と思う時がある。障害者だけが行く場所を作ってしまったのじゃないのか(F)。

作業所自体を否定しているわけではないし、もちろんね、ああいう仕組みがね、できてきた。それは僕はええことやと思っているし、要はいかに地域に出てもらうか。何も選択するものがない。行く場もない。そこに必要性はあったんやなと思う。でもそこから何十年も経過したとき

に、もうそろそろ違う変わり方をせなアカンのちゃうかと思っている(D)。

(中略)

学校の中とか、分離された部分とかに僕が一番グっとなっているところがあって。この前アスペルガーの兄ちゃんがね。26歳まで失敗しまくりで生きてきて。その兄ちゃんはIQが高いので、大学まで行ってたんやけど、やっぱ仕事はダメで。だけど、その兄ちゃんをずっと支えてきたのは近所の同級生の友達、幼馴染やったりする。

土曜日曜にボランティアと一緒に行って活動して、役割があつたり、求められたりするから彼は、仕事で失敗してても、まだ頑張っていけるみたいないな感じでね。その財産みたいなのが、どうしても養護学校云々とかで離れちゃう。いろんな人を支える力が削がれちゃう。その人を知らない人が増えちゃうというか、知っている人が減っちゃうみたいなのがね。それが大きいかなあ。その人が大きくなった時に、いろんな人がいろんな部分で、助け合えたら、支えられたら、障害者就労・生活支援センターもいらないだろうし、変な話が障害福祉サービス事業所もいらへんやろうし(B)。

(中略)

(障害者雇用促進法における障害者雇用率は)あくまでも手段であって、目的じゃない。これを目的にしちゃうと、これしかやらなくなる。手段の一つ、ツールの一つ、っていう認識をもって、じゃあ他に何ができるのってことを考えていかなければならないし、本当の目的ってなんや、っていうところは、考えてやらないと。これを目的にすると、逆に差別を助長していくんやろうな、と。少なくとも自分の立場としては感じている(E)。

(中略)

町の中に障害者がいない。そこにいないから、知らないゆえに、排除するっていう当たり前の防衛本能が働いちゃうからさ(H)。

グループインタビューにおける「今後、障害福祉サービスや職業リハビリテーションに関する『公的なサービス』を更に拡大した方が良いと思いますか？」との問いに対して、「拡大は一概には言えないとっていて、現状を見たときに(中略)『障害のある人はもうここにいたらええのや』という風潮を助長しかねない。」とDが指摘しているように、「ディズニーランド」の中では摩擦も罪悪感も発生せず、「システム」が環境や他者にどれだけ負荷をかけているのか、他者をどう排除し、発言を封じているかが非常に分かり辛くなっており、この構造が「大規模な文化的包摂と系統的かつ構造的な排除」(ヤング 2008)を同時に進行させている。

ヤング(前掲)はこのような排除と包摂の両方が一斉に起こる社会構造を「過剰包摂社会」と表現しており、それは「システムを正統化する理念とそれを構成する構造の実態の間の矛盾に、きわめてシンプルな形で起因している。」と指摘している。調査協力者はそれぞれ、障害福祉サービス事業所、養護学校(特別支援学校)、障害者雇用(率)などの影響について、「選択前提の再帰性を意識した」視点から語っているが、一方で「選択前提の再帰性を意識しない」ソーシャルワーク専門職やマスメディアが存在しており、さらなる「ディズニーランド化」による「過剰包摂」の進

行、つまり、Dの言う『障害のある人はもうここにいたらええのや』という風潮」が広がっていくことに対して危機感を表明している。

以下、A、B、Dの指摘である。

あるね、事業所さんが、(就労継続支援施設)B型から、生活介護に変えた。それを新聞報道なんかは、「障害者の人の施設がより利用しやすくなって、誰でも利用できるような施設が多くなりました」という書き方をしよるんすわ。それを見たら「良かった。障害者の人の行き場所ができた。良かったわ。」で終わってしまう(A)。

(中略)

うちの圏域だけで言ったら、来年の養護学校(特別支援学校)の生徒を(数的に)受け入れられない。だから増やす。それは違うやろ(B)。

(中略)

失礼な言い方になるんだけど、専門性があるからこそ、見えなくなっていく部分ってたぶんあったりして、そうなってしまったら、切り替えが難しくって、そこに陥ってしまうと、かなり厳しいと思っている(D)。

ソーシャルワーク専門職やその関係者は支援の対象となる当事者の人々とともに、過去から現在に至るまで、社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理を中核としながら、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかけてきた。

これまで調査協力者達が述べているような、障害のある方々が利用できる施設作り、就労困難な人々が働きやすくなるような制度・仕組み作りがその一例である。

しかしその結果、宮台・仲正(2004)らが述べているように、「共同体のためになると思って自己決定したことが、めぐりめぐって共同性を篡奪し、解体するように機能した」ことも事実であり、ハイト(前掲)も「社会や組織を変革する際、その変化が道徳資本にもたらす影響を考慮に入れなければ、やがてさまざまな問題が生じるのは明らかだ」と指摘したうえで、「これこそまさに『リベラルの抱える根本的な盲点』」と続ける。

これまでのソーシャルワークの手法、日本的ノーマライゼーション(非周辺化)に代表される社会運動のあり方は「気づかぬうちに道徳資本の蓄えを食いつぶして」(ハイト 前掲)しまい、「島宇宙」となって浮遊する私たちは無自覚に「境界を必死で設定するくせに分離を忌み嫌う」(ヤング 前掲)ようになった。

とりわけ障害のある人びとの就労支援については、蟻塚(2002)が指摘しているように、就労の場を「法律社会福祉の整備のなかで授産施設に封鎖」してしまい、「実質的な社会移動の可能性を付与することなく(中略)社会的排除の線を引き直」(ヤング 前掲)し、「過剰包摂」を助長してきた一面があることを自覚しなければならない。

だからこそ、Eは「みんなで本当の意味の共生をしていく、どっちを望みますか？」と問いかけ、Dは「第三者の問題を自分の問題として考えられるかどうか」が就労支援の成果になり得ると指摘したうえで、「それがないと社会の成長はない。すべての物事の解決策は、最終的にいきつくところは人の考え方や人の意識」と断言している。

また、他の調査協力者からも同様の指摘があり、これらを基にソーシャルワークとしての就労支援の成果と方法に

ついて考察していく、以下、E、D、Aの論述である。

(5)「社会的連帯の理由」

ちよつとね想像力を持ったら、違ふかなって思つてて。明日、事故にあつて自分が障害者になるかもしれないし、学校通つて、いじめにあつて引きこもりになるかもしれないし、何かパワハラにあつて仕事辞めたら、ニートになるかもしれないし。自分がいつ、そつちの状況に置かれるか、無きしもあらずやと思ふんです(E)。

これ、何本か質問項目があるけど、ベースにあるのは、最終には第三者のことをいかに自分の問題として考えられるか(D)。

他人事を自分事にどうするか(A)。

みんなにそういう考え方ができれば、そういう人を育てるということ(D)。

(中略)

箱(施設)は無い方が良いだろな。この中で、入所せざるを得ない状況になつたとしても、誰が望んで入りたいと思いますか？自らは望まないですよね(D)。

斉藤(2004)は「私たちが社会的連帯を形成し、維持しようとする理由とは何か。互いの生を保障し合うために、一定の資源が他者に移転されることを自ら承認する理由とは何か。」と問いを立てている。

それは、なぜ私たちソーシャルワーカーは社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理を中核とし、就労支援という手段をもって人々や様々な社会構造に働きかけるのか、なぜ私たちは共生を望み「働く」こと「働き続ける」こと支援するのか、という理由そのものであり、斉藤はその問いに対して「生のリスク」「生の偶然性」「生の受苦への感応」「生の複数性」という4つの理由を挙げている。

E、D、Aらの論述の背景にあるものは、齋藤が述べている「生のリスク」と「生の偶然性」と符合していると言えよう。すなわち、多くの人びとにとって、自らが将来直面するかもしれない諸々のリスク(例えば自分が明日、事故にあつて障害者になるかもしれないという事態)に対して、自らや自らの家族・親族の力だけでは十分に対処することはできず、将来における生の保障を十全なものとするためには、リスクに対処するための資源を集合化し、就労支援や生活支援のような手立てが必要であるということである。加えて、私たちの現在の生は、無数の偶然性の複合とその累積のうえに成り立っており、どのような時代に、どのような社会に生まれたのか。どのような身体をもって生まれたのか、どのような社会集団(人種・性別・宗教等の違いによって定義される)に生まれたのか、どのような資源(資産・所得のみならず文化資本や社会資本を含む)をもった家庭に生まれたのか、これまで災害や事故に見舞われることはなかったかということを含めて、私たちの生は自ら選んだのではなく、自らの力ではどうにもならない諸事情によって規定されており、どのような社会もそうした偶然性に恵まれた者と恵まれなかった者から成り立っているのであるから、偶然性に恵まれた人びとが、その有利な立場を利用して獲得した財を排他的に自らのものとすることは正しいとは言えないという主張である。

また、ここまでの論述から、調査協力者の一部は他者の生の受苦に感応する感受性、つまり「第三者の問題を自

分の問題と考える能力や姿勢」を備えており、他者が現に被っている(あるいはかつて被った)苦難の姿に触れて、自分自身も苦痛を感じていることが示されており、Bは「なぜ自分がそのような感受性を備えることができたのか」という問いを立て、転じて、人材教育の観点から「どうすればそのような感受性を万人に広げることができるのか」としたうえで、その手掛かりは自分達自身の生きてきた過程や環境にあるのではないかと述べている。

以下、Bの論述である。

昔ね、Aさんと一緒に「僕らが今このような考え方に至っているのはどういうことなんかな」ということを考えたことがある。普通に生きてきたつもりで、どこで僕らの琴線に触れたのかなってね。僕らの歩みの中のどこかにあるのかな。どんな経験してきたかな。そういうことを振り替えらなアカンっていう話を、人材教育を考える上でしてきた。(B)。

齋藤(前掲)も「生の受苦への感応」は『人間の自然』そのものによって基礎づけられてはいるものではなく、ある種の生の状態を苦難として描く物語／言説が繰り返され、積み重ねられることによって、私たちはそれに接して、痛ましい、ひどい等々と感じるようになっていく」と述べており、私たちが本来備えているものと言うよりも、後の環境や文化から得られるものだと指摘しているが、ここまで見てきたように、私たちはEの言う「みんな」という範囲にも、「共生」という価値にも頷き合うことができなくなっており、他者の生の受苦を感じ取る感受性を獲得するどころか、他者のイメージすら曖昧になっている。

絶対的な規範を伝達し得ないこのような状況では「生のリスクや生の偶然性を理解せよ」「他者の受苦へ感応せよ」と要請したとしても、空語としてしか響かないことは明白であり、その呼びかけは単なるカタルシスで終わるであろう。

だが、それでも私たちが「労働市場から閉め出された人びとを実質的に『棄民』とすることを望まない」(齋藤 2000)のであれば、どのように人々や構造へ働きかけを行えば良いのだろうか。

(6)「近接性の創出」

宮台(2009)は「如何にして『みんな』へのコミットメントは可能か」という問いを現代社会学に先行して立てたのが農政官僚にして民俗学者であった柳田國男であるとしたうえで、彼を参照すべきだと主張している。

宮台は柳田の日本人が公にコミットメントする「よすが」としての国土に注目したことについて、「市民が、想像の共同体である国家に直接コミットするということは、社会学的にはあり得ません。どんな社会も、人々を『みんな』に向けて動員する伝統的な装置を持ちますが、それを有効に利用する事を通じて、最終的に国民国家としての動員を達成するにすぎません。」と述べたうえで、米国では「(市民)宗教」、仏と伊では「階級」とりわけ人民戦線の伝統、英では「階級」とりわけビクトリア朝的、貴族的伝統、そして中国とユダヤでは「(血縁)ネットワーク」が人々を『みんな』に向けて動員する伝統的な装置であると指摘し、日本では「近接性」がそれにあたるとしている。

「近接性」とは「ずっと一緒にいたという事実性」すなわち、中国やユダヤにおける血筋ではなく、家族だけにコミットするというものことであり、血筋ではなく家族へのこだわりが、墓守に象徴されるように土地へのコミットメントと結合し、日本特有の風景観や国土観が誕生したのだと、宮台は柳田の考えをまとめている。

また、日本は高貴な義務がないと言われるが、日本には階級による伝統はなくとも、農村共同体的な代替物があり、それは「故郷に錦を飾る」「故郷に幸いをもたらす」という感受性であるとしたうえで、日本において国土や風景の消失、(就業形態を中心として)生活様式が変わって「近接性」つまり「長時間一緒に何かをする」環境から離脱すると、「去る者日々に疎し」の如く、共同性も奪われてしまったと続ける。

これらを踏まえ、宮台は『みんな』へのコミットメントを可能にするためには、「近接性」を創出し、国土や風景の回復を通じた「生活世界」の再帰的再構築が重要であると結論づけている。

調査協力者の言説に従えば、「自分が明日、障害者になるかもしれない、ニートになるかもしれないことを想像する能力や態度」、「他人事を自分事にする能力や態度」を「生活世界(地域、家族、共同体…)」を再帰的に再構築することによって、創出していく営みが重要であるということであり、調査協力者からはその具体例が示されている。

以下はF、A、Bの論述である。

僕、考えたことがあって。うちの(施設を利用している)人が施設の風呂を絶対使わない。地域の銭湯にヘルパーと一緒に乗り込んでいく。それを20年続けている。いつからか某スーパー銭湯のおっさんが(当時はヘルパー自身が料金を払うのが当たり前であったが)「ヘルパーさんのお代は結構です。本人からもらいます。」と。それが一つの説明できる言葉だと思う。それは素直にすごいことだと思った。(中略)それがどのような社会的意味があるのか、本人に説明してほしいとお願いしているが、本人は「わしは風呂が好きやから入っているだけやけどなあ」と(F)。

(中略)

例えばいきなりな、明日、アフリカの人と働いてくれてって言われて、アフリカの人を送り込まれたら、誰でも「ちょっと待ってくれよ」と思うやん。言葉何しゃべるんやろ。って。それと一緒にやと思う(A)。

(中略)

きっと、アフリカの人が(普段から)たくさん周りにおいて、「明日からアフリカの人が(職場に)来るで」やったら、「あーそうか」だけで済むだけの話と一緒にやと思う。(A)。

Fの示した事例は、20年にわたる銭湯通いが「某スーパー銭湯のおっさん」の行為に影響を及ぼした、つまり、「近接性が弱順序空間(選好構造)を変質」(大澤 2010)させた事例でそのものあり、Fも述べているが、この現象がソーシャルワークの成果や方法を問われた時に説明できる一つの言葉そのものであるといえよう。

互いに親しみ合う関係性、よく知っている銭湯のお客さんと店員という関係性は、公的關係の度合いに変化をもたらすのであり、障害当事者自身が施設の風呂ではなく、20年という長期間にわたり地域の銭湯へ通うことの(本人すら意識していない)社会的意味とは、積極的な「近接性」の創出と維持であり、障害のある人が地域の銭湯の風呂に入っているという風景の回復を通じた「<生活世界>の再帰的再構築」による、『みんな』へのコミットメントを復元する営みそのものである。

まさに、宮台(2014)の言う「店で立ち話が生じ、『この間まけてくれたんだから、もっとまけてよ』『持ってけ、どろぼう』みたいな世界」であり、人間が記名的・入替不可能な存在になることへの有効なアプローチの一つであるといえよう。

最終的には役割分担。最終的にいきつくところは、社会をどう変えるか、人の意識をどう変えるか。そういう仕事をやっていて、それを分担しているに過ぎない(D)。

(中略)

最近、ある社長さんと話してたけど、その方は「人を活かす」とか、「共生」とかすごく勉強してらっしゃるし、障害者雇用の意味もちゃんと分かってはる。頭、理屈でもよくわかってらっしゃるんやけど、いいことやと分かってるけども、「じゃあ障害者雇用にホンマにしなあかんのか」って時に「まだ、一経営者として腹に落ちない」って言ってはって。そら、「働ける奴と障害のある人がおったら、そら経営者として前者を雇うのは、当たり前を選択」であって、そこをどう、自分の中で整理していいかが分かった時に初めて「じゃあ障害のある人を雇おう」ってなるって言うてはって、ホンマにそうやろなって、じゃあ自分たちが何をどう伝えられるんやろ、その社長にね(A)。

(中略)

パーキンソン病のおっちゃんが欲しい？って言われたら、たぶん、「そらなかなか難しい。」やけど「こんな仕事のできるおっちゃんはパーキンソン病です」って言うんやったら、「別に良いよ」みたいな話、仕事してくれんやったらいいよってだけの話なので(B)。

(中略)

障害者就業・生活支援センターでいうたら、たぶん成果って、「自分たち(障害者就業・生活支援センター)がなくなること」が成果かなって。言う風にまず一つ思うことと。

(中略)活動していて、大きな成果の前の小さな成果と捉えられることは、就職しはった会社から「また、こういう仕事あるんやけど、また働ける人いたら言うてな」と声がかかったりとか、言うたら今までの、変な話が、障壁が下がったように感じられる時が、「ちょっと社会が変わったな」って思える時が、成果かなって思う(B)。

ここまでの論述とDの言説から明らかなように、ソーシャルワークとして行われる就労支援は様々な社会条件で生きる支援対象者が可能な限り職業を獲得し、「一つの職場で働いたという事実」や「長時間一緒に何かをする」経験ないし、それと機能的等価な経験を作り出し、「近接性」が社会から枯渇することがないようにする「システム」であり、異なった社会的条件を生きる人びとが、地域の企業や商店で当たり前のように働いているという風景の回復を通じた「<生活世界>の再帰的な再構築」の営みであり、「私たちがいまだ『われわれ』の感覚を、これまで『彼ら』とみなされてきた人びとに拡張する試み」(ローティ 2000)そのものであると言えよう。

私たち自身が他者と共にある社会で生きることを望むならば、DやEの「あなたは望んで施設に入所したいですか?」「みんなで本当の意味の共生をしていく、どっちを望みますか?」という問いかけが機能する状況、すなわち伊藤(前掲)の言う『生の責任』を公的な課題に翻訳する空間』を社会的に再生する必要に迫られる。

それは言い換えれば、互いに連関なく並立しているそれぞれの「島宇宙」に働きかけ、「同じ宇宙を生きる私たち」に作り替える作業に他ならない。

つまり、日々就労支援に携わる私たちの成果とは、Bの言う「パーキンソン病のおっちゃん」という匿名的で入替可能な存在を「おっちゃんはパーキンソン病」という記名的・入替不可能な存在に置き換えていくことであり、端的には就業場面において「おっちゃん」の希望や可能性、潜在能力について「おっちゃんを見知らぬ人びと」に翻訳し、両者の希望を調停することで、同じ「おっちゃん」について話し合える人びと、「おっちゃん」についての記憶をもつ人

びとを一人でも多く拡張していくことである。

そのために、私たちは支援対象者となる人びと、時には「自らのニーズを(明瞭な)言葉で言い表せない、話し合いの場へ移動する自由あるいは時間が無い、心の傷ゆえに語れない、自らの言葉を聞いてくれる他者が身近にいない、そもそも深刻な境遇に長い間置かれているがゆえに希望を抱くことそれ自体が忌避されている」(斉藤 前掲)彼/彼女らが望み、できうる限りにおいて職場で働き続けるために、あるいは事業主が雇用し続けられるように、つまりは「長時間一緒に何かをする」環境が維持・継続されるように、人々やさまざまな構造に働きかけるのである。

産業構造や雇用情勢、労働倫理など、私たち自身を含む労働者を取り巻く環境がめまぐるしく変化する「液化化した近代社会(リキッド・モダニティ)」において、私たちは広範な社会理論を学び、過去の失敗を研究し、就労支援に必要な技術や知識を磨き続ける必要がある。

そして、それらは「私たちがいまだ『われわれ』の感覚を、これまで『彼ら』とみなされてきた人びとに拡張する試み」としての就労支援のために動員されるべきものであり、単に資本の要求する労働者を規律訓練や更正によってひたすらに(再)生産するためや、政府や納税者へのアリバイ証明のためだけに動員されるべきでないと認識する必要がある。

その認識こそが「再帰性の泥沼」(宮台 前掲)ゆえに、妥当であることが本質的に難しくなっている現在において、私たちが「門衛化」から逃れられる唯一の道であり、就労支援がソーシャルワークで在り続けるための条件なのである。

しかしながら、その認識を持たないソーシャルワーク専門職やその関係者がいることもこれまでの論述で明らかとなっており、調査協力者からも先のBの論述にあるような「専門職や仲間をどのように育てていけば良いか」という問題意識が存在することが明らかとなっている。

以下G、A、Cの論述である。

(障害福祉サービス事業における就労継続支援施設B型の現状について)ブラックと言え、完全にその通りだと思う。うちのB型も…だけど、仕事自体を見直そうという職員の案もないし、出てこないし、今までの流れでずっとみんなやってる。仕事自体を見直すという、そんな会議の場すらないし。(サービス)利用者の人たちは、やっぱり仕事があれば「はい！はい！」とすごく、一生懸命頑張る人ばかりで、もっともっとできる能力があるのに、こっちの仕事の枠に当てはめて「やってね」という(G)。

(中略)

自分のところで、なんのために、この(就労継続支援)B型事業所をやっているのか、というところが抑えられていない(A)。

(中略)

うちの新人は(支援対象者の人びとが)就職することがゴールやと思ってる。それは間違いなと思います。その先なんて、話をしたって、ピンとこないそれこそ。理念の話とか、社会のすごいおっきな話をしても、あんまりピンとこないのが現実やと思います。ただ、本来は就職することがゴールじゃない、と思ってやってるけど。一番、分かりやすいですよ、目に見えて。そこはでも、すごく時間がかかることなんだと思う(C)。

以上のような論述に対してBは「本人がそれ(監査や外部評価など)以外ことでも、どんな社会として仕掛けをしてね。『このままじゃダメじゃん』って気づかせる取り組みが必要。」と述べており、支援の対象となる人びとの就労支援と併せて、ソーシャルワーク専門職らに対しても気づきをもたらす働きかけが必要だと指摘している。

それに対して調査協力者からは、それぞれの経験から有効となりえる働きかけについての考え方が示された。

以下、A、B、H、G、Eらの言説である。

(7)「感染的模倣」

一緒に仕事できんのもひとつですけど、違う部署に行っても、違う部署なりの繋がりができるのがうれしい。異動した人で、違う部署に行っても障害のある方について、いろいろ考えをもってくれたり、気にかけてくれるのは非常にありがたい話(A)。

それは言えますね。もともと市役所の障害関係課にいた人が、違う課に行ったときに、「Bさん、あそこの家、やばい家見つけた」とかって報告をくれる。「ちょっと心配や」って言って(電話)かかってきたり、いろんなところからですわ。スポーツの方からは、「こんな親子が相談に来たんやけど」みたいなんはね。普通に今までは全然関係ないんかもしれんけど、いろんなところにいろんな仲間が増えてるような気がするね。結局、それが進んでいくと、市役所自体が全部、そういう形になっていって、一緒にやっていた人が、上に上がっていくとね。もっと変わっていくと思うと(B)。

市全体が変わっていきますよね(A)。

(中略)

ちょっとずつ、気づいていったりとか、目が覚めてくる職員を発掘していくしかないのかな(H)。

(中略)

俺、やっぱそこで必死こいて一人熱くものを語ってたら、そのうちそいつらも熱くなってくるはずやっつてのが、俺の持論やねん(H)。

僕らが熱くならんかったらどうすんの？って思うねんけど(A)。

(中略)

私の先輩がめっちゃめっちゃ熱い人だったんですね。私はその先輩についていこうって思うタイプやったんですけど。でも私の同期とかは「あんだけ熱いとちょっとね」みたいな意見もあったし。(G)。

(中略)

僕、たまに「え！？」って思うことがあります。(熱くなっている人を見て)「何をあの人が熱くなっているんですかね？」「馬鹿じゃないですか？」って言う人っています。まあ、心の中でどう思うかは別にして、それを人に対して発言したり、熱心にやって真剣に取り組んでいる人に対して、「あの人が馬鹿じゃね？」っていう感覚になることが、正直、あんまり分からない。どっちかっていうと(僕は)熱にあてられるタイプなんで。もっと頑張らなあかんって(E)。

(中略)

行政って財産が無いので、人との繋がりしかない。誰かに頼らないと何もできない。自分のファンは増やしたい。個人同士の付き合いが、組織同士の付き合いになれば、それは行政の財産にもなる(E)。

宮台(前掲)はチェ・ゲバラことエルネスト・ゲバラを例に挙げ、アルゼンチン人であるにも関わらずキューバ革命に命を懸け、革命成功後に要職を辞退しボリビア革命に飛び込んだうえ、一介の医師であった彼が司令官に昇格した事実に触れて、彼の魅力の本質を「合理性を超える力」「合理的な理由で逡巡せざるを得ないという壁を、人に乗り越えさせる力」であると述べている。

加えて、大澤(前掲)は「私たちは不思議なことに、自己中心的な人間に対して『この人のようになりたい』と思う」ことはなく、「自己の利益を顧みず、あるいは自己の利益に反してさえも、他者に与える人物、そのような人物に、人は『感染』する」のであり、宮台(前掲)も「思わず『この人のようになりたい』と感じる『感染』によって、初めて理屈や合理性を超えて気持ちが動く」としたうえで、そのような「感染的模倣」の対象となる人間とは、端的な「衝動」に突き動かされている人間であると指摘している。

現にG、Eらが影響を受けたと語っているように、たとえ一人であってもHのように本気でものを語るという、一見非合理とも思える振る舞いが、時に人びとに合理性の壁を乗り越えさせることができるのであり、それはかつて糸賀(1983)が「愛と理解を中核とする新しい社会を創造していく」ためには、自覚者・責任者の役割と存在を重要な要素に据えたことを思い起こさせる。

すなわち合理性を超えた「熱さ」や「衝動」は同じソーシャルワーク専門職や社会で生きる人びとの「エートス^{vi}」や「選好構造」に働きかけるうえで有効な方法の一つであり AやBが述べているように、このような感染的模倣の連鎖はいずれ、私たちの住む町や私たちの地域を「われわれ」に変えてゆくだろう。

しかし、HやAが述べているような熱さはどこから調達されたのだろうか。その自覚や責任はどこからやってくるのだろうか。

大澤(前掲)は「善きサマリア人の喩え」を引用し、『善きサマリア人』におけるサマリア人の行為は、素朴な勝義の利他的行為であり、サマリア人の利他的行為は何によって引き起こされているのか」と問うたうえで、「言うまでもない。路傍で惨めに捨てられていた人物の現前によって、である。」と続ける。

つまり、「サマリア人を、善き行為、利他的行為へと駆り立てているのは、この瀕死の人物のいかなる意図ももたない現前」なのであり、言い換えれば私たちを感染させ、突き動かしているのは、日々支援の対象としている人びとのものであり、彼/彼女ら存在が私たちソーシャルワーク専門職の倫理的な起点なのである。

「私たちがいづく『われわれ』の感覚を、これまで『彼ら』とみなされてきた人びとに拡張する試み」としての就労支援は、「彼ら」とみなされてきた人びとを現前させることを通じて、つまり「近接性」を創出することを通じて、人びとに感

染を生じさせる試みでもあり、「ひとりひとりの人間が『社会の眼』を自らのうちにもち(中略)人間が本来求めていた倫理性がなんであったかをもう一度考え直す」(佐伯 1980)機会を創出する営みであるとも言えよう。

4. 結論

ここで今までの論点を整理すると、個人と社会の狭間で機能するソーシャルワークとしての就労支援の成果と方法を考えるにあたり、働きかけの対象となる社会の特徴や、そこに至るまでの過程や問題点を「(1)液状化した近代社会」「(2)ゲーム盤の消失」「(3)再帰性の時代」「(4)ディズニーランド化・過剰包摂」という観点から指摘したうえで、そこから明らかとなった社会像、個人像に対して、ソーシャルワークとしての就労支援は何を成果とし、成果に到達するために、どのような方法を用いるのかという観点で「(5)社会的連帯の理由」「(6)近接性の創出」「(7)感染的模倣」を明らかにしてきた。

また、インタビュー全体の語りの傾向として、「(障害者雇用促進法における障害者雇用率制度は)あくまで手段だと思うんですよ。目的じゃないと思うんですよ」とEが述べているように、「〇〇は何のために存在するか」、転じて「私たちの仕事は何の為にあるのか」という目的と手段の系列を踏まえながら、今となっては当たり前のように存在する制度や、私たち就労支援に携わる専門職も含めた社会資源、あるいはその中で行われている営みについて、「社会の眼」を持った言説、つまり「私たちは一つのモノを選んでいるとき、実はその背後にある一つのコトを選んで」おり、「そしてこのコトが、実は私たちの社会を、私たちの住むこの世界をどうするかという問題にかかわっている」(佐伯前掲)ことを踏まえての問題提起が多く見られた。

例えば、調査協力者自身が感じている迷いや苦悩、社会のイメージ、その中で生きる人びとやソーシャルワーク専門職、関係者の振る舞い、意識、就労支援に関する諸制度に関する指摘があり、「(コード(1)(2)(3)(4))」そのような状況下において、ソーシャルワークとしての就労支援は〇〇のために存在するのであるから、あるいは、私たちは〇〇な社会を望むのであるから(「コード(5)」)、〇〇はするべきでない、〇〇は必要である(「コード(6)(7)」)、といった言説である。

現在に至るまでのソーシャルワークの手法や社会運動に関する問題提起(「コード(3)(4)」)はそのような視点からなされており、ここからは明らかとなったのは社会と個人の狭間で機能するソーシャルワーク専門職や関係者の中にも「社会の眼」を持たない者が存在するという事実であり、人材教育の必要性と困難さも示された。

冒頭でも述べたように、「障害者等の就労支援体制の拡充」が国策として強化されようとしているが、「社会の眼」を持たぬままの専門職やその関係者がこれを推し進めるとなれば、「門衛化」はさらに加速し、国際労働期間(ILO)第159号条約(障害者の職業リハビリテーション及び雇用に関する条約)で示されているような「障害者が適当な職業に就き、これを継続し及びその職業において向上することを可能にし、それにより障害者の社会における統合又は再統合の促進」どころか、「過剰包摂社会」「社会的連帯の空洞化」はさらに進行することになるだろう。

しかし、そのような状況だからこそ、「社会の眼」を持ち、「この社会を『共倒れ』の破局」ではなく、「価値の多元性を認めた共存社会を構築」(佐伯 前掲)することを望むソーシャルワーク専門職は、広範な社会理論、過去の失敗を研究し、就労支援に必要な技術や知識を磨きながら、合理性と倫理性の両面を持って人びとや様々な構造に働きかけていく必要がある。

いま私たちが立つ地点は、昔なら素朴に信じられたものが、単純には信じられなくなった場所であり、ノスタルジーに浸ったところで、単一な文化や強固な道徳、絶対的価値観が支配した場所に戻ることはできない。

また、かつて私たちが組み込まれていた「生活世界(地域、家族、共同体…)」は時に抑圧的で、無思慮で、息苦しくあったことも事実であるが、バウマン(前掲)が言うように「他者との関係を絶つよりは保護をする方がずっとよいし、無関心であるよりは他者の不幸と連帯する方がずっと良いし、それが人々を金持ちにしたり企業のもうけを増やしたりしなくても、道徳的であるほうがはるかによい」と感じ、それこそが人間的であると思うならば、「私たちがいただく『わ

れわれ』の感覚を、これまで『彼ら』とみなされてきた人びとに拡張する試み」は明日から始めなければならない。

Fが「俺たちがいるのは論理が通用しない世界」と述べ、Dが「課題は人の意識、最大の社会的障壁って人そのもの」と断言するとき、その作業が極めて困難なものであり、長期にわたることを予感させるが、ハイト(前掲)も述べているように、「誰もが、ここでしばらくは生きていかなければならないのだから、やってみようではないか。」と私たちは自らを奮い立たせるしかないのである。

最後に、忌憚りの無い意見を述べて下さった調査協力者の方々に感謝を申し上げるとともに、自覚者・責任者としての彼/彼女らから模倣的感染が広がっていくことを期待したい。

また、本調査・研究が人材教育の一助となれば幸いである。

脚注

i 互いの生を保証するために人びとが形成する人称もしくは非人称の連帯(斉藤 2009)

ii 宮台(2009)は近代化を「<生活世界>が次第に<システム>に置き換えられる過程」と定義している。また、計算可能性を保証する手続が支配的な領域を<システム>と呼び、こうした支配がいまだに及ばない領域を<生活世界>と定義している。

iii バウマン(2001)は固定化した近代社会(ソリッド・モダニティ)と表現している。

iv Reflexibility、反省性とも訳される。宮台は再帰性を直感的な「あたりまえ」を疑った結果明らかになる妥当性といった意味で使用している。(宮台 2014)

v 進化のプロセスを通して獲得された諸々の心理的なメカニズムとうまく調和し、利己主義を抑制もしくは統制して協力関係の構築を可能にする、一連の価値観、美徳、規範、実践、アイデンティティ、制度、テクノロジーの組み合わせを、一つの共同体が保持する程度のことである。(ハイト 2014)

vi 人間の行為における一定の傾向であり、一時的な感情の状態を指す「ハトス」と対になる概念。

ここでは「心の習慣」の意で用いるが、そこには「簡単には変えることのできない行為態度」のニュアンスが含まれている。(宮台 2014)

5. 引用参考文献

- ・東浩紀(1999) 郵便的不安たち 朝日新聞社
- ・上田敏(1983) リハビリテーションを考える 青木書店
- ・糸賀一雄(1983) 糸賀一雄著作集Ⅲ 日本放送出版協会
- ・伊藤文人(2006) 包摂の実践者か、排除の尖兵か?—イギリスにおける脱専門職化するソーシャルワーカー—「日本福祉大学研究紀要—現代と文化」113号 日本福祉大学福祉社会開発研究所
- ・伊藤文人(2007) ソーシャルワーク・マニフェスト—イギリスにおけるラディカル・ソーシャルワーク実践の一系譜—「日本福祉大学研究紀要—現代と文化」116号 日本福祉大学福祉社会開発研究所
- ・伊藤文人(2009) ソーシャルワークと近代社会 「日本福祉大学研究紀要—現代と文化」120号 日本福祉大学福祉社会開発研究所
- ・齋藤純一(2004) 福祉国家/社会的連帯の理由 講座・福祉国家のゆくえ第5巻 ミネルヴァ書房
- ・齋藤純一(2000) 思考のフロンティア 公共性 岩波書店
- ・蟻塚昌克(2002) 授産施設の源流と展開 埼玉県立大学紀要 Vol.4.189-197
- ・大澤真幸(2010) THINKING「O」第8号 「正義」について論じます 左右社
- ・佐伯胖(1980) 「決め方」の論理—社会的決定理論への招待— 東京大学出版
- ・芝田英昭(2001) 社会福祉法の成立と福祉市場化 立命館産業社会論集 第36巻第4号
- ・石倉康次(2011) 社会福祉の新自由主義的改革と社会福祉施設・事業の経営をめぐる言説の推移 立命館産業社会論集 第47巻第1号
- ・宮台真司(2014) 私たちはどこからきて、どこへ行くのか 幻冬舎
- ・宮台真司(2009) 日本の難点 幻冬舎
- ・宮台真司・仲正昌樹(2004) 日常・共同体・アイロニー 双風社
- ・宮台真司(1994) 制服少女たちの選択 講談社
- ・宮本太郎(2013) 社会的包摂の政治学—自立と承認をめぐる政治対抗—ミネルヴァ書房
- ・中塚祐起(2012) 社会福祉の受け手から担い手へ—障害者の就労支援の現場から— 京都文教大学 2012年度 心理社会的支援研究 第3集
- ・ジョック・ヤング(2007) 排除型社会—後期近代における犯罪・雇用・差異 (青木秀男,伊藤泰郎,岸正彦,村澤真保,訳) 洛北出版
- ・ジョック・ヤング(2008) 後期近代の眩暈 排除から過剰包摂へ (木下ちがや,中村好孝,丸山真央,訳) 青土社
- ・ジグムント・バウマン(2008) 新しい貧困—労働、消費主義、ニュープア(伊藤茂,訳) 青土社
- ・ジグムント・バウマン(2001) リキッド・モダニティ—液状化する社会(森田典正,訳) 大月書店
- ・ジグムント・バウマン(2007) コミュニティー安全と自由の戦場(奥井智之,訳) 筑摩書房
- ・ジョナサン・ハイト(2014) なぜ社会は左と右に分かれるのか—対立を超えるための道徳心理学—(高橋 洋,訳)

紀伊国屋書店

- リチャード・ローティ(2000) 偶然性・アイロニー・連帯(齋藤純一,山岡龍一,大川正彦,訳) 岩波書店
- マイケル・サンデル(2010)これから「正義」の話をしてしよう いまを生き延びるための哲学(鬼澤 忍,訳) 早川書房
- 内閣官房 一億総活躍推進室 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ichiokusoukatsuyaku/> 情報取得 2016.2.1